

わたしの戦争体験～戦後五十周年に寄せて

朝倉郡夜須町

内田 諫吉

私は昭和17年から三井郡太刀洗町に在した太刀洗陸軍航空廠に勤務した者であります。入廠して第1番目に、木工場にて働きました。1年余りして飛行機工場に配属されたのです。私は第1機体。次に第2機体、第3機体と次々と変りました。2年余り益々戦争が激しくなり、第3機体で急急の仕事の方をするようになり、時には12時間また時には1日半位を続けて働いたこともありました。それも飛行場の片隅で、寒い時は本当に苦しかったものです。火の気は全く無しです。手がこじけて働き不能となることもありました。上官の命令はその事の如何を問わず絶対服従でした。天皇陛下のため、日本国のためということで、真面目に頑張ったものでした。

当時私は朝倉郡上秋月村に在し、航空廠まで三里余りの道を自転車で、バラスの入った道路デコボコ道を、毎朝7時の門限内に、雨の日、風の日、雪の日も頑張って勤務したものでした。若い17才から20才頃の話です。一生懸命に働いたものでした。時には自転車がパンクして、肩にかついで自転車店まで行ったこともありました。時には苦しくて涙して行ったり帰ったりしたものです。今の時代には考えられないことです。前書きはこのぐらいにして本筋に入ります。

時は昭和20年3月27日午前10時3分のことです。太刀洗の大空襲を受けたのです。私達の工場と飛行学校が第一撃を受けたのです。今迄の空襲は大村方面ばかりだったので、また大村方面だろうと機体の中の仕事をしておりました。ところが、サイレンが激しく鳴り、工場内から悲鳴的な大声がして、「ハッ」と思い機体の外に出ると、退避退避と大声で叫んでいるのです。エッと思い外に急ぎ出ると、右上に銀翼を連ねて飛んで来ているのです。

その時です、聞いたことのない異様な音、大きな音「ザーッ」とそれは大きな音です。爆弾の落ちてくる音です。アッと言う間に、大爆音大爆弾音となったのです。私が工場から5、6mぐらい出た時のことです。私は瞬間的に巾1.5mぐらい、深さ1mぐらいの「タコツボ」の壕に飛込んだのです。

時に気がつけば、一時的に意識不明だったのです。気がついた時は、真暗になり赤火がビュンビュン飛んでいるのに気がつき、そうして私は泳いでいるようでした。工場の中では、実弾がパンパンと音を立てて破裂しているのです。その時の様子は言い表わすことができません。ただただ恐怖と苦しみの中でした。

黒い煙の中を泳いでいること以外はわかりませんでした。でもその時にホッと気がつけば、私は壕の中に半分埋まっているのです。それで上に上ろうとしても、足が上に上って来ないので、でも必死な思いでもがいて上にやっと出たのです。歩けないのです。ふと気がつけば足の甲に破片が立って刺っているのです。私は無我夢中にて、その破片を手で引抜いたのです。そ

の時の破片は熱く焼けていたのです。その時手袋をしていたのですが、手袋が「コゲテ」いました。破片は足の腹まで抜けて刺っておりました。後でわかったのですが。逃げようと思っても歩けないのです。でも必死に這うようにして逃げたのです。それで自分の防空壕に入ろうと思って行ったのですが、壕は完全につぶれて、中に入っていた者は生理めになっていたのです。ゆえに私は太刀洗川の岸に逃げたのです。

その岸边に来た途端に2撃目が来て、うずくまっていたら、大きな土の固りが背中に落ちて来たのです。その時は息がつまり「ウッ」としたものです。その時です、班員がかけよって来て、「班長殿大丈夫ですか」と声をかけて来たのです。その時始めて頭に傷を負っていることがわかったのです。もう血が流れ落ちる落ちる。それは凄い血でした。うずくまっている時に血が太ももに落ちて、血でピタピタする迄になりました。その時無意識的に頭に手を当てたら、頭の骨に「コツ」と当たったのです。骨の表面まで削り取られていたのです。後でわかったのですが、12.5cmの傷でした。もう5mm体が高くあったら私は死んでいたとの話でした。神の助けだったのでしょうか。私は助かったのです。頭の骨迄傷があったのです。その時です、私は頭を三角巾で縛り、でも頭の血は止まりませんでした。ふと足を見ると、血が作業靴越しに吹き出ているのです。ゆえに膝上を「ゲートル」で縛り、3撃目の来る前に太刀洗川を渡り、向う岸迄逃げたのです。竹藪の中に逃げたのです。そこで苦しんでおりました。

ようやくにして第3撃目が終り、苦しいのでウーアーとうなっている時に、同じ職場の者が助けに来てくれ、担架に乗せ医務室の前まで運んでくれたのです。これ迄の時間は30分位でしょうか、あるいは40分位わかりません。医務室の前は死亡者や負傷者で一ぱいでした。私は足の手当をして貰うべく靴を脱ごうとしたのですが、抜けないのです。ゆえに靴を「ハサミ」で切り、脱いで、衛生兵から応急処置をしてもらって、当時の太刀洗陸軍病院に運ばれたのです。実は余り遠くないのですが、その時、車の中の時間は長かったのです。車で移送中にちょっと格納庫を見たのですが、ふっ飛んでしまっておりました。涙したものです。苦しみのうちに、ようやくにして病院に着いたのですが、それからがまた大変でした。病室にはもう負傷者で一ぱいでした。もう死にかけているものもいるし、各人が泣き喚き、それは大変でした。私もそのうちの一人です。私ももう駄目と言われていたそうですが、お陰様にて同じ村の衛生兵の方がおられ、注射を2、3本して下さったのです。ゆえに助かったのでしょうか。そう思っております。

それから時が立って夜中になりました時に、また警報が出て病院の上を通って行くのです。病室は騒然となり、それは大変でした。私も足の痛いのも忘れて近所の畑へ逃げたのです。警報が解除となった後は動けないのです。衛生兵の方に背負ってもらい、病院へ帰りました。そうして苦しんでいる所へ両親が来て泣き喚きしたものです。室内は泣く者、わめく者、それは大変でした。

そうして夜が明けて、軍用車トラックに乗せられ、別府の陸軍病院に移送されたのです。まずは田主丸までトラックで行き、田主丸から汽車で別府迄行ったのです。別府に着く迄に3回

程警報が出て、3回程トンネルの中に退避したのです。その時でも騒然となり、汽車から飛下りる者さえおりました。私は動けないのでじっとして、解除になるのを「ドキドキ」しながら待っておりました。そうしてようやくして別府の病院に着いたのです。これから別府の陸軍病院で闘病生活が始ったのです。別府でも十数回の警報が出て、退避したものでした。壕に入っても決して安全ではないのですが、仕方がありませんでした。そうして時が立って行くうちに、突然両親と弟が見舞に来てくれたのです。これにはびっくりしました。でも嬉しかったのです。その時です、警報が出て大変でした。退避する所もわからず、オロオロウロウロして私は心配でした。心配しましたが、無事に終り、面会は1時間余りで終り、別れたのです。両親達が帰った1時間位して、また警報が出たのです。両親達は大分でウロウロしたそうです。生きた気がしなかったそうです。大変だったろうと思いました。心配でした。夜となり、真暗闇で途方にくれたそうです。

それから私の事です、頭にウミがたまり、マスイなしで手術をしたものでした。手術はあっという間に終りました。傷の中にゴミが入っていたのです。まだほかに治ってない所がありました。耳鳴り、太モモの傷、肩の傷、胸、足、頭、歯が治っていませんでした。現在でも足の指、右から3本は治っていないのです。自由に曲らないのです。耳鳴りもそれ以来ずっとしています。一人苦しんでおります。また私は20年6月1日に兵隊にも行ったのです。足や頭からまだシルが出ていたのですが、無視して頑張って頑張って兵隊に行きました。実は行かなくても良かったのですが、世間の目があるので苦しみながら行きました。またその頃家にでもいたら世間からヘンな目で見られるので、頑張って行きました。入隊しても空襲を受けました。